

# おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—大きな1個より小さな10個—

NO. 44



100ページの資料を一度に渡されて「読んでおいてください」と言われるのと、毎週月曜日の朝に10ページ分ずつ「今回はこれです」と10回渡されるのでは、どちらがいいですか？私は、自分では後者のタイプだなと思います。あまり集中力がないので、一度にこなす量は多くないほうが頭に入ります。但し、「全部で10回渡します」と終わりを教えてもらえると、尚うれしいです。みなさんはいかがですか？同じ100ページですが、渡され方によって負担感が違うと思います。その人のペースもありますからね。「全部渡してもらって自分で加減していくほうがよい」という人もいでしょう。段取りの仕方や、一度に受け入れられるキャパは人それぞれですからね。

さて、子ども達に目を転じてみましょう。一度にできる範囲は一人ひとり違います。

例えば、生活習慣の身支度場面。カバンからモノを出したり入れたり、所定の場所に収めたり。いろいろな作業の塊です。一度に全部渡されると、何から始めてよいか整理がつかずに次第に集中できなくなっていく子もいます。ひとつひとつが雑になってしまう子もいます。一つひとつのことはできる力があるとなると、思わず「ちゃんとやりなさい」と言いたくなりますよね。

大切なのは、言われて直すことよりも、できることの積み上げです。「次はこれね」「次なんだっけ？」などと声をかけたり、グッズを示したりすることで、自分から手に取り、行動を起こしやすくなります。個別に声をかけた分だけ「できたね」と褒められる回数も増えます。キャッチボールも気持ちよくなります。もしどうしても続けられなくなって残りを大人がやったとしても、本人は「できた」で終わっています。怒られて終わらないことが、次の機会を少し前向きにさせます。

例えば、プリント学習の場面でこんな配慮もあります。1枚に課題が10個、それが5枚あったとします。内容が少し難しかったり、集中力が続かなかったりする場合、5枚のノルマは変えずに、1枚に載せる課題の数を減らします。「1枚できたね。すごいぞ！さあ次だ」のリズムに乗って、成功体験を重ねられるようにしていきます。自信＝次への意欲ですからね。その気になって、6枚7枚やってくれば、取り組んだ課題数は同じになります。

“子どもに合わせて個別に配慮していく”とは、“できないことを手伝う”というだけの意味ではありません。その子に合わせてステップを細かくし、「わかった」「できた」の成功体験を重ねていくための配慮です。「出来なくなったら教えてあげる」は、「失敗で終わったら手伝う」と言っているのと同じです。子ども自身が自分の力で取り組んだ結末がいつも失敗体験になってしまいます。大きな1個をドンと渡すより、小さな10個を小出しで渡したほうが分かりやすいのなら、それでやる気になるのなら、決して特別な配慮ではないと思います。子どもに丁寧に関わっていくとは、そういうことなんじゃないのかなと思います。

ところで、意欲を持って繰り返し取り組むには、同じことを繰り返し楽しむ経験を重ねていくことが大切です。滑り台を何回も何回も繰り返し楽しむような、同じ絵本を何度も繰り返し読んでもらうような体験です。“学び”のベースは、やっぱり“遊び”。それも人と一緒に楽しむ“遊び”です。小さい頃からの積み重ねが、ちゃんと先々につながっていきます。

今年もみんな、きっとドラマチックな育ちを見せてくれます。楽しみです！（R2. 1）K

